

要旨

目的 生理的な経過を尊重し、正常分娩を担う助産師にとって可能であれば前期破水を予防し適時破水での分娩進行を願うものである。前期破水は、子宮内感染や羊水過少、臍帯圧迫、それに伴う胎児機能不全等のリスクを誘発する。助産所ガイドラインでは、前期破水後 24 時間待機しても陣痛が発来しない場合は、連携医療機関へ搬送となるため、助産師は 24 時間以内に陣痛発来することを願いさまざまなケアを行う。しかし、具体的にどのような助産ケアが行われているかの実態が認められない。そこで今回、正期産における前期破水後の分娩転帰を追跡し、自然待機の際の助産ケアの実態を調査し、出産場所と出産歴等での分娩転帰や助産ケアの違いに関して調査することとした。

方法 本研究は 2007 年以降の診療録および助産録から検索する、量的記述研究である。対象は日本人、正期産、単胎、頭位の条件を満たした産婦とした。対象の基本統計を算出し、正期産における前期破水後の分娩転帰に関して助産所群、病院群の両群間でクロス集計を用いて比較した。さらに出産歴別でも同様に比較した。なお統計ソフトは SPSS ver.19.0 for windows を用い、検定水準は 5%とした。

結果および考察 日本人、正期産、単胎、頭位の条件を満たす助産所群 1031 例、病院群 973 例の分娩のうち、前期破水は助産所群 190 例(18.43%)、病院群 122 例(12.54%)に認められた。前期破水後に自然に陣痛発来したものは助産所群では 180 例(94.74%)、病院群では 86 例(70.49%)であり、助産所群のほうが病院群よりも有意に多かった($\chi^2=34.74$ 、 $p<.000$)。前期破水ののち、自然に陣痛発来するまでの所要時間は、初産婦では助産所群で平均 452.61 分($SD=604.91$)、病院群では平均 658.62 分($SD=521.71$)であり、助産所群のほうが有意に短かった($t=-2.149$ 、 $p=.003$)。助産所群では 4 時間以内に陣痛発来したものが 52.86%と過半数を超えたが、病院群では遅く 12 時間以内となって過半数 59.42%を超えた。経産婦では、助産所群と病院群の二群で有意な差はみられなかった。初産婦において助産所群では、ビショップスコア 5 点以上のもののほうが、4 点以下のものより 4 時間以内に陣痛発来するものが有意に多いが、病院群においては、その特徴は認められなかった。経産婦も同様の結果であった。

前期破水後に自然に陣痛発来した者の転帰は、助産所群、病院群でいずれも 90%以上が経膈分娩となっていた。帝王切開術となったものは助産所群で 2.22%、病院群で 8.14%と助産所群での帝王切開術適応となった例が有意に少なかった($\chi^2=5.12$ 、 $p=.024$)。

前期破水から陣痛発来までの間に行われている助産ケアのうち、助産所のみで行われていたケアは自宅待機が最も多く、病院のみのケアにはアクティブケアが挙げられていた。

結論 前期破水と診断されたものは、出産歴・年齢・ビショップスコア・医療機関の特性等で自然に陣痛が発来するまでの所要時間に違いのあることが判明した。